

ハイデガーの現象学とキルケゴール

若見理江

ハイデガーの『存在と時間』にはキルケゴール的モチーフが数多く見出せる一方で、両者の間には決定的に異なっている点があるように見える。つまり、神の問題という点であり、ハイデガーの哲学を「キルケゴールの世俗化」として特徴づけることができるかもしれない。しかし、ハイデガーとキルケゴールの相違点を「神」に見出す見解は、ある意味においては正しいとしても一面的であり、第一に、「実存的・存在者の」および「実存論的・存在論的」という区別を十分に考慮していないという点で、そして第二に、それゆえハイデガーとキルケゴールの諸概念をほぼ同じように捉え、そこから神の問題の有無という外見上明白な相違点を引き出すという点で『存在と時間』の試みを捉え損なっているように思われる。

ハイデガーは『存在と時間』で「現存在があれこれ態度をとる (sich verhalten) ことができ、またつねに何らかの仕方態度をとっている存在それ自身」を「実存」と名づけている。この実存の定義における「態度をとる (自らを関わらせる)」という表現を、ハイデガーは講義でフッサールの「志向性」に言及するさいにしばしば用いていた。ハイデガーはフッサールの認識論的に理解された志向性を「気遣い」として、つまり「自らを関わらせ、その関わりによって自己自身が規定し返さ

れる」という循環的なあり方として捉え直す。このような「態度をとること」として捉え直された志向的な関わりが、ハイデガーが「超越」と呼ぶものである。「実存的」という表現が実存する現存在自身の問題に関わり、「存在者の」という表現が存在者という観点から現存在やその他の存在者を問題にしているのに対し、「実存論的」は現存在の存在である実存を構成する契機を問題にする場合に、「存在論的」は広く現存在の存在ないし現存在以外の存在者の存在を問題にする場合に用いられているのであるが、ハイデガーが「実存論的」や「存在論的」と言う場合には、「態度をとる」という意味での「志向的な関わり」が念頭におかれている。つまり、キルケゴールの自己の定義において「態度をとる (関係する)」ということが、自己意識や反省的な関わり方を意味しているのに対し、ハイデガーが「自らを関わらせる」という場合、意識することや反省することを可能にしている働きが考えられているのである。

けれども、なぜ、ハイデガーは、『存在と時間』におけるような「存在への問い」を必要としたのだろうか。その背景には真理の問題があったように思われる。ハイデガーは初期のころから、倫理的、宗教的な領域においても、真理が理論的な見方に基づいて、つまり「普遍妥当性」を基準として考えられていることを問題にしていた。「存在への問い」は「そのつど私である存在者」による「実存の遂行」によって進められる。ハイデガーは初期フライブルク講義期にこうした問いの方法を「形式的告示」と名づけ、形成していった。ここに私たちは、『存在と時間』に散見される「キルケゴール的モチーフ」以上の、

第3部会

キルケゴールからの影響を見出すことができる。ハイデガーは「カール・ヤスパースの『世界観の心理学』に寄せる論評」で、キルケゴールによってなされたような厳密な方法意識はめったに達成されなかったこと、そしてこの方法意識が見落とされるならば、キルケゴールの決定的なものが手放されるということを通じて述べている。「方法意識」とは「間接的伝達」を指していると思われる。ハイデガーの形式的告示もまた、形式と内容が不可分に呼応するような方法であり、「形式的」とは、世界内存在の、したがって気遣いの構造を意味している。ハイデガーの現象学は、キルケゴールの諸概念を「志向的関わり」として捉え直すことによって、キルケゴールの方法意識を受け継いでいるのである。

ハイデッガーと洞窟の比喩

——哲学者の死について——

田 鍋 良 臣

「哲学の終わり」。この言葉はハイデッガー思想の代名詞として広く流通している。だがその意味するところは言葉の容易さに比べ、難解である。はたして「哲学の終わり」とは何か。それを知る手がかりが晩年に発表された「哲学の終りと思索の課題」(一九六六)の冒頭で与えられている。ハイデッガーによると、このタイトルが示すのは「一九三〇年以來くりかえし企てられた試み、『存在と時間』の問題設定をより始源的に形成

すること」(SD, 61)である。ところで、「哲学の終わり」と関係がありそうな問題、「哲学者の死」がはじめて論じられたのは、まさしく引用にある「一九三〇年」直後のことである。それはプラトンの「洞窟の比喩」(以下「比喩」と略記)解釈の中で登場した。「比喩」解釈は一九三〇年以前にも見られるが、そこでは「哲学者の死」は注目されておらず、むしろ「比喩」に即して『存在と時間』構想の仕上げが重ねられている。ゆえに、「哲学者の死」が「哲学の終わり」を示唆するなら、一九三〇年を境にしてなされた「比喩」解釈の変容のうちには、「存在と時間」の問題設定をより始源的に問うこと、鋭く言えば、「存在と時間」の問題設定を内在的な批判にかけること」(SD, 61)の痕跡が残されていると考えられる。

本発表は、以上のような見通しのもと、一九三〇年前後での「比喩」解釈を「『存在と時間』の問題設定」に注目しつつ、以下の二点にまとめた。①一九三〇年以前の「比喩」解釈は、「形而上学の基礎づけ」を画策する『存在と時間』構想のいわば「設計図」を担っている。洞窟からの解放は基礎的存在論として、洞窟への帰還はメタ存在論としてそれぞれ解釈することができる。だが「比喩」解釈の最終局面で、哲学の始源である神話／宗教の問題にぶつかり、その概念把握をめぐってハイデッガーは動揺する。②一九三〇年以後の「比喩」解釈は一転、基礎的存在論に属する現存在分析にのみ即したものとなる。ここではじめて、洞窟への帰還に際して「哲学者の死」が問題となり、同時に、「真理(隠れなさ)の本質に非真理(隠れ)が属する」ことが、根源的な仕方であらわとなる(GA34, 90f.)。